マリ・パップ＝カルパンティエにおける母親像

金　山　富　美

2023年 3 月

島根大学法文学部紀要言語文化学科編　島大言語文化　第54号　抜刷

島根大学法文学部

マリ・パップ＝カルパンティエにおける母親像

金　山　富　美

Ⅰ．マリ・パップ＝カルパンティエの矮小化とその問題点

マリ・パップ＝カルパンティエ（1815 –1878）は, 2 歳から 6 歳までの貧困家庭の幼い子供の保護を主たる目的として1826年にパリに誕生した慈善色の強いサル・ダジルsalle d'asile[1] を，その目的・役割・内容すべてにおいて刷新し，現在のフランス幼児教育の礎を築いた陰の立て役者である。

七月王政から再び共和政へと時代が大きく転換した1848年，その保護施設を，国民を「無知と虚偽から守る」（ 3 月 6 日通達）ための最初の教育の場へと生まれ変わらせようとした第二共和政初代文相カルノと公教育高等審議会は，当時すでに15年余のキャリアを積み，七月王政下最後の文相サルヴァンディにより1847年に創設された国内初のサル・ダジル指導者養成所の所長に抜擢されて優れた後進を育てていたパップ＝カルパンティエ（以降カルパンティエと略記）[2]に協力を仰いだのだった。彼女は現場で培った経験を多くの同業者と共有すべく著作『サル・ダジル経営指針』（1846）も世に出していた。

カルパンティエの提案をもとに，サル・ダジルはエコール・マテルネルécole maternelleと名称を変え，その内容もまたエコールつまり学校と名乗るべく，慈善や保護にとどまらず教育を顕示する施設へと改善されようとしていた。だが，半年も経ないうちにカトリック教会支持者とブルジョワ保守派多数の議会はカルノを失脚させ，後継の文相ファルーは1849年に入るやカルノ案を

---

[1] 通常は「（古）保育所」と訳されるが，asile「保護・収容施設」の字義どおり，慈善託児所あるいは児童保護施設と訳す方が正しく，もともと教育色は極めて薄かった。1835年には, 35県で102のサル・ダジルが存在した。1836年にはサル・ダジルに関する初の勅令が出され，表向きには教育省の監督下に置かれる形にはなったが，現場に任せられていたのが実情だった。BERGER-TANCEREL, Joss : « *École maternelle – État des lieux et cri d'alarme !* », *Spirale* No.53, 2010, pp.234-245 (https://www.cairn.info/revue-spirale-2016- 4 -page-234.htm) を参照（2023年 1 月22日アクセス）。

[2] カルパンティエの生涯については，以下拙稿に簡単にまとめている：「マリ・パップ＝カルパンティエとその思想」,『女性空間』第23号，日仏女性資料センター（日仏女性研究学会）,2006,pp.65-67.

棄却し，名称変更も不要とした。

日本の幼稚園（あるいは保育園）にあたるエコール・マテルネルという表現は，第三共和政下，文相ジュール・フェリーのもとでサル・ダジル総視学官に就任したポリーヌ・ケルゴマール[3]（1838–1925）が着目し,1881年に初等教育の義務化・無償化・非宗教化を決定づけたフェリー法制定と同時に，公式の名称として定着することになる。カルパンティエが没して 3 年後，最初の命名からすでに33年が経過していた。以降，フランス共和国における子供の身体的，知的，道徳的発達を目指すもっとも最初の学校はエコール・マテルネルと呼ばれ，その表現は一切改変されることなく現在に至っている。

さて，ここで考えてみたいのは，カルパンティエがなぜエコール・マテルネルという名称を提唱したのか，という点である。ルソーから継承された「自然」つまり女性＝母の自己犠牲と献身を単純にあてはめたに過ぎないのか，それともマテルネルつまり「母親的」に何らか特別な意味合いを与えていたのかという，いわば素朴な，しかし根本的な問題である。フェミニズム的視点からすれば，その表現には児童教育に対する性役割分業観を含んでいるとみなされるだろう。実際，そのように理解されたために，謙虚な姿勢を生涯崩すことのなかった彼女の存在は一層矮小化され，教育思想家としてもフェミニストとしても枠外に置かれてきた[4]といえる。

確かにカルパンティエは『女性教諭の手引き』（1870）の序文に，母親とし

---

[3] エコール・マテルネル命名は，その名称定着の年度からしばしばケルゴマールに帰するとされるが，本文に記載したようにそれは誤謬である。ケルゴマールはカルパンティエが没した翌年の1879年に，初等教育局長としてフェリーの右腕であったフェルディナン・ビュイッソン（1841-1932）に薦められて視学官に就任している。また彼女は，パリ・コミューン活動家で無政府主義者でもあった地理学者エリゼ・ルクリュ（1830-1905）の従姉である。前者ビュイッソンはカルパンティエの「事物の学習」に注目し，第三共和政下の「事物の学習と初歩の科学的知識を含む省令」（1882年,1887年）の作成に携わった人物，一方のルクリュは，私塾教師の頃にカルパンティエの教科書を用いて貧しい子供たちに自由な教育を施したルイーズ・ミシェル（後年，パリ・コミューンの伝説的人物の一人となる）とつながりがある。こうした人間関係も含めて，ケルゴマールにとってカルパンティエは，意識しないではいられない尊敬すべき先達であったと容易に推察できる。なおビュイッソン及びルイーズ・ミシェルそれぞれのカルパンティエとの関係性については，拙稿「マリ・パップ＝カルパンティエとルイーズ・ミシェルにとっての自然誌」（『比較文化研究』No.129,2017,pp.51-62）を参照。

[4] この問題は，現代的視点からまとめられた以下カルパンティエの伝記でも触れられている。COSNIER, Colette : *Marie Pape-Carpantier – Fondatrice de l'école maternelle*, Fayard, 2003.

ての資質が理想的な初等教育に有用である[5]と書いている。だが，言葉の使用に関しては時代性を含むコンテクストの考慮があって然るべきであり，「母親的」の表現一つをとって，多くの女性たちを優秀な教員として社会に送り出したカルパンティエの事績に評価を下してよいのかは疑問である。彼女は宗教色とそれこそ性役割分業観に執着した教会とブルジョワ保守層に目の敵にされ，かつ幾人かの文相に黙殺されていた。本稿では，カルパンティエが自らの実質的な活動とその原理を社会に広く浸透させようと，その生涯果てるまで挑み続けた執筆活動，その著作の中に，彼女が「母親的」という言葉に込めた意味について考察していきたい。

Ⅱ．カルパンティエに語られる神，男，女

前述のように，カルノ主導のわずかな期間ではあったがサル・ダジルがエコール・マテルネルと名称を変えた時，カルパンティエはすぐに『エコール・マテルネルの実践教育』（1849）を発表する。その冒頭に，カルパンティエが神について語っていることにまず注目してみたい。国民を「無知と虚偽から守る」はずの共和国の教育に，一体なぜ敢えて神をもち出したのだろうか。

慈善という美辞麗句を掲げながらサル・ダジルの現場では，知識や指導方法を体系的に学んだことのない修道女が一定時間，まるで羊飼いが羊を放牧し回収するかのように，子供を囲いの中に入れて見失わない程度に見張っていたに過ぎない。それは民間でもほとんど変わらず,19世紀産業社会のなかで放り出される子供の数は増加の一途をたどり，サル・ダジルの数も増え続ける[6]一方で，そこは相変わらず教育の場と呼び得るものではなかった[7]。対象は貧困層であったため，長く等閑視され，むしろそれでよしとされてきた経緯により，カルノ案が出された頃，社会はまだ理想としての教育形態を受入れるには遠かっ

---

5 PAPE-CARPANTIER, Marie : *Manuel de l'institutrice*, Hachette, 1870, p.1.

6 1843年の記録では，フランス全土で1,489のサル・ダジルが96,192人の子供を見ていた。注1前掲書，p.235.

7 カルパンティエ自身，幼い頃にサル・ダジルに預けられた。学習の記憶は，老女から多少の読み書きを教わった程度で，思い出としては4歳の頃，他の子供に意地悪をされて腹を立てたことを，その理由も問われぬままに，彼女は苦行服を着せられ辱められ，罰せられたことだった。その仕打ちを彼女は当時の指導者たちの「いつものやり方」と述べ，生涯忘れることはない。その体験から，彼女はサル・ダジルにも学校にも行きたくなくなったと回想している。PAPE-CARPANTIER, Marie : *Conseils sur la direction des salles d'asile*, 6 e édition, Hachette, 1887, pp.28-29.

たのである。二月革命の直後でもあり，プロレタリアートへの警戒と並んでカトリック的道徳による社会秩序の維持も叫ばれていた。実際，反発は即座に起こっている[8]。神についてのカルパンティエの言及には，そのような社会状況への彼女の配慮があったのだろう。もちろん庶民の子として生まれ，母子二人の貧しい暮らしのなか，カトリック的世界で生きてきた彼女の宗教観がそこに表現されていることも否定はできない。とはいえ，事情はそこにとどまらない。彼女が神を語る動機は，むしろ別のところにあると考えるべきであり，以下説明するように，新しい教育法の受容者つまり女性をはじめとする新しい時代の教員のため，特に彼らが導く子供のためであったととらえなければならない。

カルパンティエが教科書や指導書を通して大切なメッセージを届けたい相手は，言うまでもなく子供たちである。彼らの親は，朝から晩まで働かなければパンを口にすることができず，子供たちはほとんど目をかけてもらえなかった。ユゴーは，多くの幼児が町を徘徊し，本来ならば小学校で学ぶはずの子供も大人に混じって働いて[9]，その後は疲れ果てた身体で手持ち無沙汰に路地でたむろする，日々そのような様子を目の当たりにして，「あの子供たちは皆どこに行くのか。誰一人としてその顔に笑顔はない」[10]と憂えた。身体的にも精神的にも必要な配慮を払われることのないまま，ましてや知育の機会など与えられずに育ってきたそうした子供たちを，教師はいかに理解し，導いてやれるのか。カルパンティエは経験を通して，「子供についての学びは，書斎の静寂の中ではなく，学校の騒音と動きの中で深まるものだ」[11]と心得ていた。サル・ダジルのもっとも大きな欠陥の一つを自ら体験した[12]カルパンティエは，自身がその指導者となって以来，子供のありのままの姿を現場でとらえ，彼らから学び続けてきた。わずかな僥倖[13]にも巡り合えず顔をほころばせることもない

---

[8] MAYEUR, Françoise : *L'Éducation des filles en France au 19e siècle, Hachette*, 1979, p.99.

[9] 産業社会は子供の労働を必要としていたため，8 歳から12歳までの子供は日に 8 時間の労働を許されていた。もっとも，ブルジョワ資本家は労働年齢を 6 歳に引き下げ，子供の労働時間を引き延ばすことを要求していた。児童労働については以下を参照：清水克洋「産業革命期フランスにおける労働者の貧困問題－ヴィレルメ調査報告の検討を中心に―」，『経済論叢』127巻,1981, pp.251-272.

[10] HUGO, Victor : « *Melancholia », Les Contemplations*, Poésie, Gallimard, 1973, p.129.

[11] LUC, Jean-Noël, « *Les premières écoles enfantines et l'invention du jeune enfant* », *Histoire de l'Enfance en Occident du XVIIIe siècle à nos jours*, Seuil, 1998, p.327.

[12] 注 7 参照。

[13] カルパンティエは幸い，元教員で篤志家のジャン＝フランソワ・フィリップ・ド・ヌブー

生徒を導くためには，まずはこの世界について目を開かせる必要があると彼女は考えたはずだ。そのための手がかりが神であったのではないか。ただし，そこで語られる神は，幼い頃のカルパンティエに問答無用の罰を与えた修道女や指導者が，罰による矯正の根拠にした教会の神，厳めしい神とは異なる姿をしている。

カルパンティエの神は，Dieuの語源に示されるとおり「光」である。また，そこから発する温かさ，安らぎともいえるだろう。だからこそ『エコール・マテルネルの実践教育』で，著者は「あなた方の空腹を満たすパン」「寒さから守る上着」[14]を与えてくれるのが神である，と語り始めるのだ。さらに，空を見上げた時に子供たちの目に映る自由に宙を舞う鳥も，足元に這う小さな虫も，子供たちの父も母も子供自身もそこに帰する，だから何も不安に思う必要はないと教える。カルパンティエは目には見えない創造主の存在を教え子に示し，彼らの足元と行く先を照らそうとする。その神は，かつてジャン＝ジャック・ル・バルビエの手で「人権宣言」の扉絵に描かれた，天使が黄金の杖で示す光の中の眼差しと重ね合わせることもできるだろうが，幼い者に対しては何よりも，罰ではなく理解から始める懐深い知恵の神だといえる。

人道主義者ユゴーでさえ時に「哀れにして偉大なる民衆，彼らは軽率で盲目だ！自分が何を望まないのかは知っていても，何を望んでいるのかは分からない」[15]と対応に呻吟したが，この文豪以上にカルパンティエは民衆の子供たちを決して見放したりはしない。

『エコール・マテルネルの実践教育』発表に先立つ 3 年前，カルパンティエが最初の著書『サル・ダジル経営指針』で，神を次のように語っていたことも思い出そう。

> 子供たちに，神はただ私たちの主であるのではなく，それ以上に，私たちの友達であると教えましょう。神は私たちを統べるけれど，私たちを愛

ルの後援を受けることができた。彼女は後に「私は情緒的なものを母から，理性，精神の秩序においてはド・ヌブール氏に多くを負うています」と語ったという。GOSSOT, Emile : *Madame Marie Pape-Carpantier, sa vie et son œuvre,* Hachette, 1890, p.31.

[14] PAPE-CARPANTIER, Marie : *Enseignement pratique dans les écoles maternelles*, 9e édition, Hachette, 1901, p.15.

[15] HUGO, Victor : *Choses vues*, Coll. « Quarto », Gallimard, 2002, p.516.

し，この日々の幸せの希望，より高みの世界における陰りのない至福を保証して，私たちに許しを与えてくれるのだと伝えましょう。[16]

教会が語る神は抽象的であり，男性的であり権威的であった。カルパンティエの心に長じても癒えぬ傷をつけた指導者たちは，その神にただ従順なばかりで，目の前の子供たちのことはなおざりだった。若い頃にラマルティーヌをはじめとするロマン派詩人に魅せられ，自ら詩作もしたカルパンティエは，抽象とは対極にある身体や心の領域に関わる感受性溢れる言葉を指導書の至るところに散りばめている。そして子供たちに，神が喜びと許しを与える友であると語りかけ，彼らに笑みを取り戻させ，また彼らの教育にあたる仲間にもそう語らせながら，懲罰という名ばかりの指導をただし，指導者の盲従を解き，新しい時代の教師の姿勢を示そうとしたのである。

カルパンティエにおいて，神はいわゆる男性中心主義的な価値観でとらえられてはおらず，人との関係において絶対的権威を象徴するものでもない。創造神は人間の主である以上に友達なのである。では，男と女について，カルパンティエはどのように理解し，それを教えようとしたのか。

『創世記』は，神が土くれから自らの姿に似せてアダムを形作り，そのアダムの肋骨からエヴァを形作ったと記す。それを，使徒パウロは次のように説いたとされる。

男は神の姿と栄光を映す者ですから，頭に物をかぶるべきではありません。しかし，女は男の栄光を映す者です。というのは，男が女から出て来たのではなく，女が男から出て来たのだし，男が女のために造られたのではなく，女が男のために造られたのだからです。 だから，女は天使たちのために，頭に力の印をかぶるべきです。いずれにせよ，主においては，男なしに女はなく，女なしに男はありません。

『コリントの信徒への手紙一』11章７～11

パウロはまた次のようにも述べる。

---

[16] 注７前掲書，pp.41-42.

女が教えたり，男の上に立ったりすることを，私は許しません。むしろ静かにしているべきです。なぜなら，アダムが先に造られ，それからエヴァが造られたからです。またアダムは惑わされませんでしたが，女は惑わされて過ちを犯しました。しかし，女が信仰と愛と清らかさを保ち続け，貞淑であるならば，子を産むことによって救われます。

『テモテへの手紙一』 2 章11～15

この人間観は19世紀の教会に継承されており，それをブルジョワ保守派も自明の理としていた。

カルパンティエも，神が万物を創造したエピソードに触れ，男と女を造った経緯を語る。だがそこで彼女は神の意志を，男と女の関係について教会と異なる見解のもと，子供たちに次のように教えている。

アダムは目覚めた時，自分に似たその女性が友達であり，神が与えてくれた共に生きる相手だと理解しました。彼女はエヴァと名付けられ，神は互いに愛し合い共に安らかに幸せのうちに生きていけるようにと創造したその男と女を，祝福しました。

（中略）

「エヴァは男にとって何だったの？」

―「彼の連れ合いで友達でした」

「友達ってどういうこと？」

―「愛し合い，尽くし合い，喜びと悲しみを共に分け合う人のこと」[17]

神は人にとって光であり友達であり，その神の手による男と女は，たとえその誕生に後先があったとしても，二人は友達として造られ，相互的である。それこそが神の意図であり目的であった，とカルパンティエは明言する。そこには男女の関係に栄光や力の差異を認める権威的な聖書の解釈はなく，もちろん上下関係もない。聖書に示されるように，男性的であることが神の属性だとするような含みも一切ない。

神という表現は一であっても，その含意には変容があり，その変容のもとで

[17] 注14前掲書，pp.33-34.

男女に対する理解も変動している。そこには慈悲という名のもとに不適切な内容を改善しないまま子供の教育を独占してきた教会と，それを容認し続ける社会に対するカルパンティエの抵抗を看取できるだろう。ユゴーをはじめとする詩人たちが，従来は聖職者が人々の生を意味づけていた役割を自身の使命として引き受けるようになった[18]その時代，カルパンティエもまた教育という現場から，女性に課された沈黙を破って一石を投じているのである。

Ⅲ．カルパンティエの「母親的」とは

司祭はすべて「神父」と呼ばれ，現代でさえ男性に限定されているのは，パウロの「女が教えたり，男の上に立ったりすることを，私は許しません」という男性中心主義に由来するものでもあろう。カルパンティエの時代，男性優位は教育にも及び，サル・ダジルの修道女と民間の女性指導者ともども子供の指導法を教わる必要はないとされ，対象者を観て適切な方向に促すための能力を培う機会をもてない状況を招いていた。このことは初等教育においても変わらなかった。1850年のファルー法[19]は，女子小学校の女子教員に対しては修道会が出す許可証lettre d'obédience を国家公認の教員免許状に代わるものと認めていたため，彼女たちは向上心をもって努力する必要もなく，彼女らの知識や教養は事実上，修道女の修養とほとんど変わらなかった。かつてカルパンティエがサル・ダジルに預けられていた時からすでに数十年経ているのにもかかわらず，女子初等教育においてさえ，女性教員が現場で教えることができるのは，またその指導のもとで女子が教わるのは，カルパンティエの少女時代とさして違いのない初歩の読み書き，ごく簡単な計算程度だったのである。

カルパンティエはファルー法公布から間もなく，『サル・ダジルの新つづり字教本』（1852）を刊行し，その後も次々とサル・ダジルや初等教育の現場で活用できる教科書や指導書を執筆して世に送り出す。それは，女子小学校の女子教員が（しばしば修道女たちにとっても），まがりなりにも教育と名付けることのできる内容を現場に提供できたということであり，同時に，彼女たち自

---

[18] BÉNICHOU, Paul : *Romantismes Français*, Tome I, Tome II, Coll. « Quatro », Gallimard, 2004を参照。

[19] 以下文献を参照：谷川稔他著『規範としての文化—文化統合の近代史』ミネルヴァ書房, 2004, p.273.；大津尚志「ファルー法期フランスにおける初等教育と宗教教育」,『武庫川女子大学 学校教育センター年報』第 2 号, 2017, pp.21-31.

身にとって学問と呼べる学びを得られる機会となった。ファルー率いる公教育高等審議会では教会関係者が幅を利かせていたが，なかでも強い影響力をもったデュパンルー[20]が庶民の出自であるカルパンティエの実力をみくびり，しばらくの間彼女の活動を注視していなかったこと[21]はかえって幸いだった。

カルパンティエが幼児から児童への教育をマテルネルつまり「母親的」と形容したのはなぜかという，当初の課題に立ち返ろう。神という言葉をもち出した動機については前述のとおり，社会情勢を考慮したうえでの，教育の対象者である子供たちの学習への誘いのためであった。カルパンティエに語られる神にはカトリックの教義遵守や男性中心主義的思考は影を落としておらず，彼女の神が創造した男と女には上下の区別も主従関係もなかった。知という観点においても，カルパンティエは男女に優劣の差を認めることはない。そのことは，同時期に刊行された『男性教諭の手引き』と『女性教諭の手引き』の内容が，後者序文のごく一部（初等教育における母親の資質の有用性の明記）[22]を除いてうり二つであることによって証明できる。つまり，カルパンティエが「母親的」と語っていたとしても，女性を宗教的・文化的な「自然」に押し込めようとしたわけではない。また，初等以外の中等そして高等教育への女性の関与を阻んでいるわけでもないということになる。

ここで，カルパンティエを教育者というよりも19世紀の生身の女性の一人としてとらえ，彼女の意図を推察してみよう。男は男であるという事実それ自体で，何かをなし得る未来への可能性と期待をもつことができるかもしれないが，女はそうではなかった。たとえば，妊娠したエマ・ボヴァリーの意識と無意識相半ばする心情を，作家フロベールは次のように描いている。

> エマは男の子が欲しかった。その子は強くて逞しくなるだろう。ジョルジュと名付けてやろう。エマは自分の過去の空虚さを埋めようとするかの

---

[20] デュパンルーが女性にある程度の知育（学問の初歩）を授ける理由は，それが女性の精神性の本質的な保証として作用し，女性をまじめに働く妻にし，幼い子供の教育者としての「知的作業」によって家に引き付けておく利点と考えたからだった。エリザベート・バダンテール『母性という神話』鈴木昌訳,1998, pp.316-318.を参照。

[21] デュパンルーはじめ教会とブルジョワ保守派からのカルパンティエに対する攻撃は，彼女が第二帝政下の文相ヴィクトル・デュルイに重用され，表舞台（1867年の万国博覧会開催時の教育講演，翌68年のサル・ダジル総視学官任命など）に上がってから激化する。

[22] 注 5 参照。

ように，子供に対して希望を抱いた。[23]

なんといっても男は自由である。様々な欲望をもって国々を駆け巡り，邪魔なものを切っていかに遠い幸福でもつかみ取ることができる。だが，女はいつまでたっても邪魔されるばかりだ。[24]

ここには，家父長制モラルを強化させた社会の規範化によって内側から蝕まれてしまった女性の姿がある。偶然に女に生まれたことにはじまった不幸は，町医者シャルルとの結婚後も，母親になっても変わることなく，悩みは一層深まるばかりだ。社会が女性に求める美も優雅な立ち居振る舞いも刹那的な自己満足に過ぎず，心の平穏に何ら役立つものではない。ヨンヴィルの神父ブールニジアンは「心の薬」を処方することができない。幻滅するだけのエマの姿は，多くの女性たちにとって無縁ではなかっただろう。「信仰と愛と清らかさを保ち続け，貞淑であるならば，子を産むことによって救われます」と語ったパウロの言葉はただ空虚に響く。

エマに象徴されるように，偶然にも女に生まれたことが運命の悲哀の根源であるのなら，女として今あり，女として生きていくことの意味はどこにあるのか。その苦悩を，カルパンティエ自身が知らなかったわけではあるまい。彼女こそまさしく，父の顔を知らない庶民の子，しかも女として生まれ，その貧しさゆえに少女時代の多くを侮蔑の眼差しを浴びながら育ってきたのである。過酷な運命を泳ぎ切ってきたカルパンティエは，だからこそ，実にしたたかである。

実際に母親になることを選択しないとしても「母親になり得る」女性，つまり男性と異なり生命を誕生させ得る「女性の優位性」を「母親的」と明示することによって，カルパンティエは，それまで社会のあらゆる場所において，しかも古来から愚かで[25]未熟で依存せざるを得ない性として定義づけられてき

---

[23] FLAUBERT, Gustave : *Madame Bovary, Œuvres complètes de Gustave Flaubert*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1983, p.126.

[24] 同上，p.130.

[25] 本稿で前述したパウロの「アダムは惑わされませんでしたが，女は惑わされて過ちを犯しました。」の断定とその後に続く女性の劣性は，『創世記』 3 章のヘビによるエヴァの誘惑と原罪を根拠としている。

た（後世のボーヴォワールの言葉を借りれば「他者」にされてしまった）女性たちの意識下の挫折を，むしろ特権として塗り替えようとしていたのではないだろうか。マテルネル「母親的」は，教会とブルジョワ社会が推奨する女性の典型的な姿であり，彼らが決して不穏に感じることのない表現である。と同時に，女性自身にとっては馴染みがあり耳を傾けやすい言葉でもある。カトリックの家父長的思考によって，謙遜と受容そして忍従の人である聖母マリアを模範像として子を産み育てることを王道とされ，それをほとんど唯一の道と刻印されてきた女性たちに対して，カルパンティエは当の「母親」を表向きの看板として用いながら，女性を知識獲得の入口に立たせようとしたのではなかったか。そして，実践のなかで女性に自らの存在意義と自己尊重を回復させていくのである。「母親」「母親的」という標記は，そのためのストラテジーといえるかもしれない。

カルパンティエは「私は情緒的なものを母から，理性，精神の秩序においてはド・ヌブール氏に多くを負うています」[26]と語ったが，感性も理性も精神性のいずれについても女性が獲得し付与することは不可能ではない，いや機会を得られれば可能だと，カルパンティエは確信している。「母親的」であることを活用して，この人物は，過去からほとんど疑われることもなく連綿として継承されてきた知識伝達の家父長制的構造の中に切り込もうとしたのではないだろうか。カルパンティエの教科書には，寛容な友人としての神の記述が見られる一方で，美しい姿を装いつつ実は同性にとって抑圧的にも映る聖母マリアは登場しないが，それは不思議なことではないのである。

カルパンティエがもっとも力を入れて執筆し,1869年に発表した『学校とサル・ダジルと家庭の動物学－目による教育』（以下『動物学』と略記）をもとに，上記についてあらためて考えてみよう。この教科書は，小鳥や猫，ロバなどの身近な動物を観察して生態について学べるようにと1858年に彼女が発表していた『子供のためのお話と事物の学習』を，約十年の月日をかけて動物の数を大幅に増補し，博物学という自然科学にとどまらず言語学習，社会科学，そして哲学的対話の側面からも内容を増大増強した全5巻の教科書であり，同時に指導書でもある[27]。この書物はまた，タイトルが示すとおり，小学校で学

---

[26] 注13参照。

[27] 注21に記載のとおり，カルパンティエは1867年の万国博覧会の折にヨーロッパ中の初等教育関係者に向けた教育講演会講師を務めたが，そこで彼女が得た人間関係や経験もその2

ぶ子供もサル・ダジルのような施設の年少の子供も，そして家庭をはじめとするそれ以外の場所に身を置く子供にも使うことができるよう意図して著された教科書である。言い換えれば，男女の区別なく小学校教諭が，修道女を含むサル・ダジルの指導者が，家庭の母親をはじめ誰もが活用できるということを意味する。対象を広げすぎて曖昧だという現代人の懸念には及ばない。本書は好評を得，ヨーロッパ各国で翻訳された。フランスでは再版を重ね，驚くことにカルパンティエの死後,1914年まで重版されている[28]。

この書物の冒頭に，カルパンティエは「なぜ博物学は学習を遠ざけられたり，まったく考慮されないものになってしまっているのでしょう。それはとても魅力的で多彩で，易しく，実践的に考察できる要素がいっぱい」と記したうえで，謙虚でありながらしたたかに，「しかも宗教性があります」[29]と付言している。そして動物界の生き物を，ほとんど動かず「動物よりもむしろ植物に似たもの」[30]まで網羅し，それら一つ一つを心弾むエピソードでつなぎつつ，子供同士の生き生きとした遊びの描写と大人と子供の間の対話による学びを交えながら，いわば「道草」をあえて行いながら，生き物の生態を説いていくのである。その教えの要点を，彼女は次のように言う。

> 私はこの博物学の学習が，いわゆる技巧や誇張や方法論によるものでなく，素朴で親しみのある形で与えられて，初等教育の様々な段階において，あるいは初等教育以上の水準の学習にも応えるものになることを期待しています。学習を続けるなかで，おのおののクラスで，子供たちそれぞれが自分の力に応じて，何か興味のあることをくみ取っていくことでしょう。そして，そこに何かを培った者は，おそらくは従来のもったいぶった科学では学び得なかった，まるごとの知識を身につけることができるでしょう。[31]

年後に刊行された本書に盛り込まれている。

[28] 1882年生まれのジャン・ジロドゥの小説『シュザンヌと太平洋』（1921）にカルパンティエの名前が数回繰り返して見られるのは，この作家の学習の記憶と何らかの強い思い入れによるものと推察できる。

[29] PAPE-CARPANTIER, Marie : *Zoologie des écoles, des salles d'asile et des familles -Enseignement par les yeux*, Hachette, 1873, 1 ère série, Préface-VI.

[30] 同上，Préface-XIV.

[31] 同上，Préface-VIII.

「もったいぶった科学」が，知識の男性支配と同義であることは疑いない。そして，それぞれの生徒が「自分の力に応じて，何か興味のあることをくみ取っていく」という文言には，仰々しい科学には欠けているおおらかで自由な学びが主張されているといえる。

カルパンティエはさらに「多くの優れた大人たちが，それぞれの立場で自然を研究するのに人生を費やしています。（中略）けれど，そうした偉大な科学も完璧にはほど遠いのです。彼ら学者はそこで知覚すべきことをまったくもって知ってはおらず，本当に知るべきことを全然わかってはいないのですから！」と大胆に語り，その理由を「より多くのことを学べば学ぶほどに，人はもっと多くのことを知らないということ」[32]への認識が不足しているからだと言い切る。このことは「知らない」ということの重要性と，それゆえに学習し続けることの大切さを示唆しているのと同時に，一方では誰かを「知らないままでいさせること」への責任を厳しく問い，他方では人生において「知らないままでいること」の不本意と痛恨をつきつける。

『動物学』にカルパンティエが登場させる子供の指導者は，男性教諭，女性教諭，医師，父親，母親，老兵，叔父，叔母など様々だ。興味深いのは，子供を除く彼ら大人の描写に関して，医師や父親，男性教諭等をそのまま女性教諭や母親，叔母にとり替えても，あるいは父親を母親と書き直しても，ほとんど支障が起こらないということである。それぞれの描き方や話す内容に，いわゆる男性的論理や女性的情緒の偏向は見られない。子供を包み込む特性と，善悪や正誤の区別をただして事訳を説く姿勢は，『動物学』の指導者すべてに見られ，言い換えれば男性のような女性の先生が，女性のような男性の先生が，そして父のような母，母のような父の教えがそこにある[33]。穏やかな口調，子供に分かりやすい丁寧な論理展開，動物と人との関わりのなかに見られる非道や迷信および道理に基づかない慣習や差別を払拭しようとする姿勢，そして生き

---

[32] 同上，Préface-XV-XVI.

[33] たとえばペリカンの章には，大道薬売りが客寄せに「ペリカンがおのが腹を引き裂き，その血をヒナに飲ませた」と歌うのを耳にした少年がそれを受け売りし，村の老女もそう話していたと友達に面白おかしく聞かせている場面がある。それを聞いた女性教師は，子供たちを前に「無知な人とペテン師は，間違ったことを確信的に語るのですよ。お話が十分な情報を集めたうえで語られているのかをよく考えて判断しましょう」と前置きし，水鳥の生態を説いていく。同上, 4 e série, pp.204-206.

とし生けるものすべてに対する尊重と慈しみが，共通して示される。

ただ，上記の指導者のなかで異なる点がひとつだけある。それは『動物学』が人にもっとも身近な哺乳類に始まってもっとも縁遠い生き物，抽象的な生物の紹介へと移行していくのに従って，つまり自然の観察と博物学の知識がより深まり，専門的な語彙も増えるにつれて，母親の登場が増し，この書物の中の代表的な指導者，先生になっていくことである。特に最終巻の昆虫から環形動物の章では，子供に既知の事柄を教えながら自ら探求しようとする母親の姿が描かれる。母親も子供たちとともに嬉々として野にでかけ，少年のように冒険をし，新たな発見をしていく。その姿は，蛹から羽化した蝶にも似て，女性，母親のメタモルフォーゼとさえ形容できる。このように描かれる母親には，この世のあらゆる物事や知に対して謙虚に，子供とともに「まるごとの知識」を学び続けてほしいとカルパンティエが願う「人」の姿が投影されている。

> 人は現在を超え，それ以上のものへと到達したいと願い，（中略）自らの向上をめざして，この宇宙という創造の神の中に理想とする姿を求めます！その理想に近づけるように努めていきます。[34]

カルパンティエのこの言葉は，母親という特権をもつ女性が「多くの優れた大人」「学者」と呼ばれる人々と同様に，あるいは彼ら以上に，この世界のあらゆるものから多くのことを知り，深く学ぶことができ，新しい自分を創り出していく人であることを宣言している。

カルパンティエの姿勢には，奇しくも現代のフェミニスト神学のパイオニアであるカタリーナ・J.M.ハルケスの言葉―「問題は，できる限り女性的になることや，あるいは男性的になることではなく，われわれの「自己」における神の霊の力学展開のなかで，女性と男性の各自が人間になることが重要なのである。」[35]が重なる。

---

[34] 同上, 1 ère série, Préface-XVI.なお，「この宇宙という創造の神」は原文で，Le Dieu créateur de l'Univers と表現されている。なお，神は通常は無冠詞で用いられる。ここは「宇宙の創造者である神」と訳すことも可能だが，カルパンティエの著作を精読すると，神と宇宙とを同格と理解した方が的確である。彼女は，神は宇宙あるいは自然の創造者であると同時に，人間をとりまく宇宙や自然そのものでもあると考えているようだ。

[35] カタリーナ・J.M.ハルケス「マリア」出村みや子訳，エリザベート・ゴスマン他編『女性の視点によるキリスト教神学事典』，日本基督教団出版局,1998, p.295.

エコール・マテルネルの名付け親であるカルパンティエの「母親的」なものを，あるいは『人権宣言』の扉絵上部左側に描かれたアレゴリーにたとえることもできるかもしれない。束縛の鎖がはずされて市民主権の一歩となったように，カルパンティエの「母親的」という表現は，文字通りの学問と教育に接岸して大きく飛び立つことを志向する女性のために，解放を準備して旅立ちを促す一種の踏切り台として用いられたということである。